

1 提言

不登校問題の解決には、早期発見・早期対応を基盤とする予防的プログラムの確立が重要である。

- 早期発見・早期対応プログラムで情報の流れる問題解決の学校システムに転換 -

2 基本的な考え方

適応指導教室での学びを中心に、不登校のとりえ方の再確認を反映させた、不登校の早期発見・早期対応プログラムを作成することを考えた。

今まで学校における不登校への取組は、子どもが不登校になってしまったからの事後的な対応、つまり対症療法的対応へ偏る傾向にあった。不登校に陥っている子どもへの支援は重要なことである。しかし、不登校問題解決には、不登校の兆候を示すような子どもに対する、早期発見・早期対応への対策がさらに重要で、注目されるべきだと考える。不登校の早期発見・早期対応がなぜ重要であるかについては、その主な根拠を以下に5つ示す。

不登校は、不登校の期間が長くなればなるほど、再登校が難しくなる。長く不登校が続くと、学力の問題や人間関係、心理的な混乱など、不登校を持続させる状況が生まれてくる。

不登校児の多くは、不登校に陥る前に、兆候として何らかのサインを発していると思われるが、予防にかかわる支援が体系化されておらず、適切な対応が図られていないことが多い。

背景、要因等の特定が難しいなど、不登校解決への特效薬（有効な手立て）が見出せない今、早期発見・早期対応など予防的対応（不登校を出さないための対策）への比重は大きくなる。

「不登校は、誰にでも起こりうるものである」という、不登校のとりえ方に立ち、「誰にでも起こりうる」からこそ、日頃のかかわりや早期発見に力を注ぐべきである。

本研究に携わる2人の研究者が、適応指導教室に身を置いて、参加観察しながら情報収集した、フィールドワークの気づき・学びから、適応指導教室からの復帰も簡単でない、など早期発見・早期対応の重要性がキーワードとして浮かび上がってきた。（P511、「二つの適応指導教室の学びから見えてきたもの」参照）

不登校の早期発見・早期対応で課題となるのは、サインを発見することと、それを集めて子どもの実態を把握しながら、どうアセスメントするかにあると思われる。また、予防的な側面をもつ早期発見・早期対応の取組は、日常的に実践されるので、すべての子どもに対して有効に働くものとも言える。個に視点を向けた、きめ細かく柔軟な取組が要求されるので、教師の力量アップにも結びつくと思われる。不登校問題は、子どもや学校・教師、家庭が解決すべき共有課題というとりえ方から、子どもの実態・状態に応じて支援チームを組織し、それぞれの特性を生かしながら対応していくことも有効に働くと考え。さらに、適応指導教室の子どもへの支援に有効であった、定期的な評価の実施を重視する円環的な支援も重要と思われる。不登校と各発達段階における発達課題とのかかわりも重視して、サインが見られたときは、クリアしていないと思われる発達課題を補うような対応策を講じることも大切にするべきだと考える。サインを見せた子どもの心の居場所としての学級の風土づくりも、予防的プログラムを考える上で重要である。

何よりも大切に考えるのは、子どもとのふれあいの中からサインを発見し、サインを情報として収集しながら、それらを通して子どもを背景から理解することと、見出した課題を自己課

題に置き換えながら方針を立て、適切に対応し、問題を解決できるようになることである。そして、この不登校の早期発見・早期対応プログラムという不登校問題の解決を目指した実践を通して、情報が流れ、相互コミュニケーションの成立する、問題解決の学校風土へと学校システムが転換することを図っていきたい。

3 早期発見・早期対応のためのポイント

不登校の早期発見・早期対応のためのポイントは、次の4点と考える。(図12)

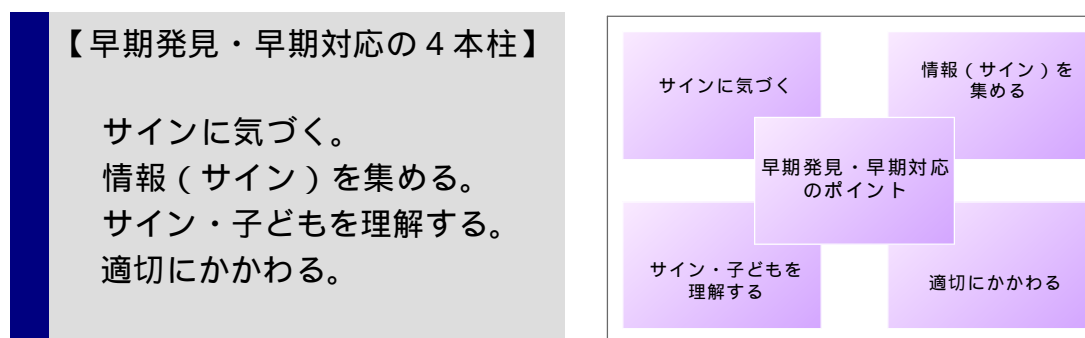


図12 早期発見・早期対応のポイント

4 早期発見のとらえ方

不登校の早期発見には、以下の2つの水準があると考えられる。

第1の水準

まだ不登校に至る前の段階で、予知ないし予測してみること。
不登校の兆候・前兆を見落とさずに気づくこと。

第2の水準

行動化し始めた不登校に、なるべく早い時期に気づくこと。
欠席が不登校によるものであるということを見出すこと。

両方の水準を合わせて、早期発見ととらえる。心身等の変化の見極めが難しく、第1の水準で発見できない場合は、第2水準での発見になる。支援の経験を重ねるなどした場合には、第1の水準での早期発見も可能になると考える。

5 不登校の前段階(前兆段階)の状態像

現代の子どもたちは、学校教育や家庭生活や教育体制、社会のシステムなどのストレス源(ストレッサー)から「潜在的ストレス」を受け、ストレスの強い生活を送っていると考えられる。この環境的な条件が支配する状況に、性格傾向やコーピング・スキルが不足しているなどの内面的な条件が加わると、不登校の前段階(準備状態)に至ると考えられる。この段階で、周囲の人からの支援(相談に乗る、励ます、アドバイスするなどのソーシャルサポート)が少なかったり得られなかったりすれば、ストレス反応の一部が出始める。つまり、学校で生活を送っているが、不満や不安、さびしさ、怒り、いらだち、悩みなどを抱え、それらを解消できず、表情・態度、言葉、身体症状、行動(問題行動)などで、心のサインを表出している状態、ということができる。

6 不登校のサインのとりえ方

不登校の兆候を現すサインは、不登校の状態像（P 513、 の3「不登校の状態像」参照）の前段階を示すサインなので、図11にもある症状化（身体面・心理面）、行動化（外向性・内向性）のカテゴリーで考えることができる。こうとらえることによって、サインへの対応についても指針がもちやすくなると思われる。

サインの4つの各カテゴリーについては、次のように考える。

症状化・身体面...身体に症状としてサインが現れてくるもの

症状化・心理面...精神的・神経症的な症状としてサインが現れてくるもの

行動化・外向性...自分の外側の世界に向かう行動としてサインが現れてくるもの

行動化・内向性...自分の内面に向かう行動としてサインが現れてくるもの

以下に、不登校のサインを表したツリー図（図13）を示す。

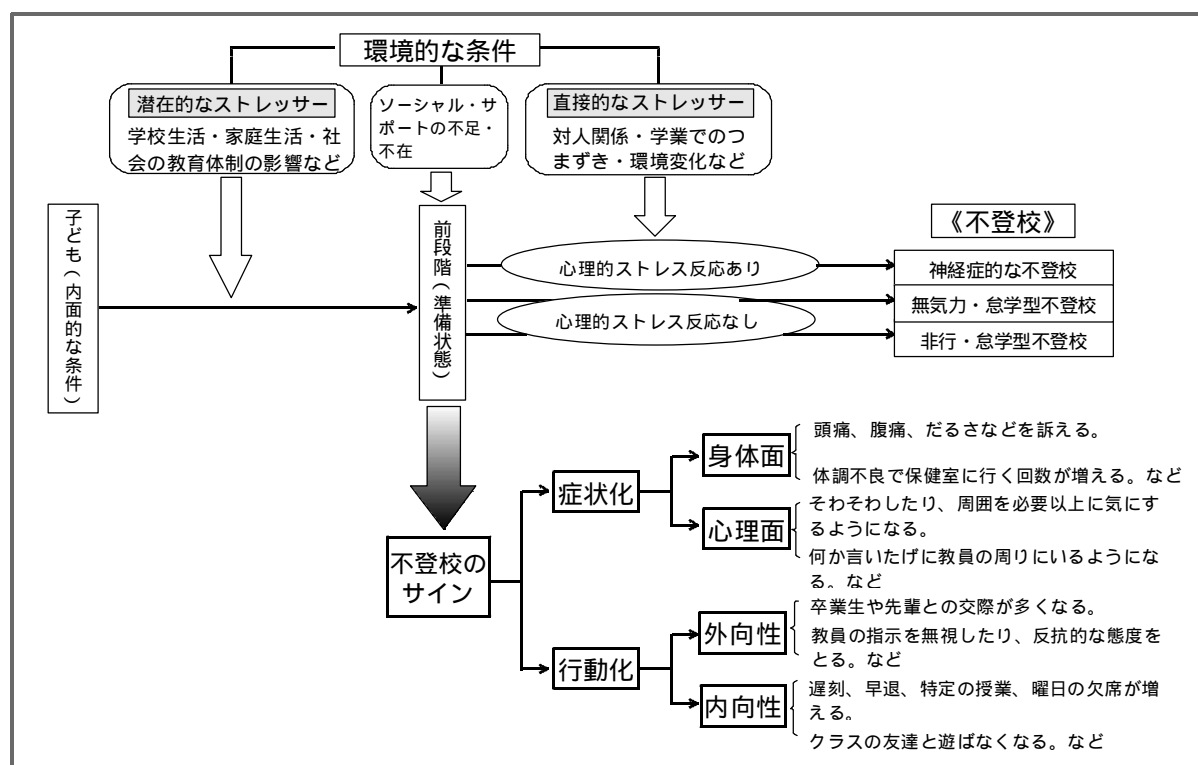


図13 不登校の発現と不登校のサインのとりえ方(梅垣 1990作成, 小林 2005一部改訂)

7 不登校のサインに応じた対応策・支援策

6のように不登校のサインは様々なものが見られる。サインをしっかりと受け止めて、これらに対応することが不登校の予防につながると思われる。それぞれのサインに対する対応策・支援策を以下のように挙げてみた。

症状化・身体面のサイン例
《体調不良で保健室を訪れることが多くなる。》
対応策・支援策
- 体の不調を訴えているのだから、心でなく、体に注目する。症状が癒されると、心も安定してくる。心身共に落ち着くと、課題に向かうエネルギーも出てくる。 「仮病じゃないのか。」「体が悪いんじゃないでしょ。」「学校で頑張ってください。」

などと責めないで、体の病気として受け止めると、気持ちを楽にさせることがある。
(干渉を控えて、心理的な刺激を減らす。)

- 体のつらさに共感して、薬や保温の世話をし、食事の工夫や眠りやすいような配慮を心がける。
- 養護教諭と緊密に連携を取る。
- 他の教師や家庭などからも情報を集める。

症状化・心理面のサイン例

《漠然とした不安を抱えており、周囲を必要以上に気にするようになる。》

《何か言いたげに教員の周りにまとわりついたり、逆におどおどしたり、ぴりぴりした様子が見られ、教師の目を避け始める。》

対応策・支援策

- 本人との面接で、不安や不満に耳を傾け、つらさや悩みを受け止める。
- 自分の気持ちをうまく言語化できないこともあるので、その気持ちを相談者(支援者)が代わりに言い表してやると、心の安定が図れることがある。時には手紙でのやりとりなどの工夫をするとよい。
- 絵を描いたりゲームなどを一緒にゆったりしてふれあいながら、気持ちを自由に表現できる場をつくり、感情を解放させてやる。
- 対人不安が強い場合は、友人関係を調整してやることも大切である。
- 好きなこと・得意なことにかかわり、認めたりほめたりして、自己肯定感や自信を育てる。(自助資源・本人のよさを生かす。)
- 親への甘えや依存は、子どもの不安を和らげるために必要な場合もあるので、むやみに抑制しない。
- 子どもが安心して学級にいられるような、一人一人の心の居場所がある学級作りを心がける。
- 他の教師や家庭などからも情報を集める。

行動化・外向性のサイン例

《教師の指示を無視したり、反抗的な態度をとる。》

《卒業生や先輩との交際が多くなる。》

対応策・支援策

- 非行や遊びから現れるサインの場合が多い。対応の中心も、担任や生活指導の教員になることが多い。この子どもたちの多くは人との関係を求め、さらには教育を求めている。彼らはコミュニケーション能力に乏しいため誤解されやすく、教育の場から置きざりにされがちである。本来は手厚い教育が必要な子どもたちと言える。支援の方法としては生活の立て直し、基本的生活習慣の確立が重要である。
- 明らかに非行や怠学が原因の場合は、的確な支援や指示が必要となる。「がんばってすぐ登校しなさい。」などと、時には引っ張り気味に登校の働きかけを行うことも求められる。しかし、その場合でも彼らの話をじっくり聴いて、その上で善悪の判断をしっかりと示すことが必要である。
- 欲求をコントロールする力が弱いので、集団の中で、それを養えるような活動を取り入れるとよい。
- 他の教師や家庭などからも情報を集める。

行動化・内向性のサイン
《休み時間に一人でボツンといることが増える。》 《遅刻、早退、特定の授業や曜日の欠席が多くなる。》
対応策・支援策
○ 声かけをして、君のことを気にしているという、メッセージを送る。 ・「最近調子はどう？」・「元気かい？」 ○ 日頃からのふれあいを大切に、人とかかわることのよさを教師が示す。 ・よく話を聴く。 ・温かな眼差しを送る。 ・年少であるならスキンシップも大切である。 ・仕事を一緒にしたりして、行動を共にする場面を増やす。 ○ 学習への自信を喪失しているケースも少なくないので、その場合は、放課後一緒に補充的な学習をするなど、学習への支援を心がける。 ○ スポーツや集団でやるゲーム、体験活動などを意図的に取り入れ、人とかかわることの楽しさを味わわせながら、外へと向かう心を広げる。 ○ 他の先生や家庭などからも情報を集める。
《何をやるにも無気力で消極的である。》
対応策・支援策
○ 無気力・無感動な状態にあって、自分で何もしようとせず、指示されると抵抗なく行動するが、長続きしない。このようなときには相手を認めながら、早期に登校の働きかけをする。 ○ 頑張りすぎて、身も心も疲れてやる気を失っているような場合は、本人がリラックスできる時間をつくってやって、話をじっくり聴く。 ○ 「活動性」の発達課題の達成が不十分か、それ以前の「信頼感」や「自立感」の達成が不十分なことが考えられる。相手に依存してしまう気持ちを取り去り、自分でできることは、自分でやろうという気持ちを育てる。 ○ 自分のことは自分で決めさせて、自分でやらせ、できたら認めたりほめたりしながら、自主性・自律性の獲得を目指す。

8 発達課題の考え方を取り入れた支援とチェックリストの作成・活用方法

(1) 不登校の予防を目指す発達段階に応じた支援

不登校のサインを各発達段階における発達課題の観点から見極め、不足していると思われる発達課題を補いながら支援を行うことは有効な対応策であると考えられる。

以下に、小学校低学年における取組（特徴・不登校のサイン・対応方法）を例として示す。

小学校低学年＜自主性のめばえ＞

特徴

- 小学生は教師や親の影響を受けやすい。時には親よりも教師の話をよく聴く場合もあるので、一層教師の言動には注意する必要がある。教師の影響を受けやすい時期なので、上手に支援すると効果が大きい。
- 興味をもったことは頑張れる。
- ちょっとしたことから、子どもが母親から離れることに不安をもったり母親の方が不安をもったりする。

不登校のサイン

- 母親の後を追うようになる。
- ちょっとしたことでも機嫌が悪くなる。
- 休み明けに登校を渋るようになる。
- 声が小さく元気よくあいさつできない。
- 外遊びが苦手で友達の輪に入れない。
- やりたくないことは、避けてしまう。

対応方法

- 母親と一緒にいれば登校できる時は、母親がつき添って行くようにする。教室で一緒に座ってもらい、少しずつ離していく。
- 子どもに任せる部分を多くして、後ろから見守っていくスタンスが大切である。
- 教師はできるだけ声をかけて、小さいことでも認める。
- うまくできたらしっかりほめる。
- 時間を守ったり、宿題がしっかりできたりするように支援する。

* このほか、「小学校中学年」、「小学校高学年」、「中学校」、「高等学校」の取組（特徴・不登校のサイン・対応方法）については、資料編に掲載した。

(2) 各発達段階の発達課題を考慮に入れた早期発見のチェックリスト

チェックリスト例

早期発見のチェックリスト（小学校低学年）

分 類	サ イ ン	はい	いいえ	わからない
症状化 身体面	トイレに行く回数が増える。			
	下痢・発熱がある。			
	頭痛、腹痛、おう吐がある。			
症状化 心理面	笑顔が消え、ささいなことで泣く。			
	作業が雑で遅くなる。			
	机の周りが散らかる。			
	教師にまとわりつく。			
	学校が嫌な理由を聞くと「いじめられた」とか「どこか痛い」と繰り返す。			
行動化 外向性	少しのことでかっとなる。友達に乱暴になる。			
	強く注意すると相手の欠点を言う。			
行動化 内向性	無口になる。			
	やりたくないことは避ける。			
	元気にあいさつができない。			
	外遊びが苦手で友達の輪に入れない。			
	休み明けに登校を渋るようになったり、兄弟が休むと自分も休むと言うようになる。			
	学校にいても家に帰りたいたいと言う。			
	母親と離れると不安を訴える。			

発達課題を考慮したサイン

*このほか、「小学校中学年」用、「小学校高学年」用、「中学校」用、「高等学校」用の不登校（長期欠席）の早期発見チェックリストは、資料編に掲載した。

(3) 不登校や不登校の兆候が発生しやすい時期のチェックリスト

不登校や不登校の兆候が発生しやすい時期には、その時期特有のサインが出ると思われるので、それらを加味した、チェックリストを作成することができる。

以下に、その例として、「中学１年の夏休み明け用」のチェックリストを示す。

早期発見のチェックリスト（中学１年の夏休み明け用）

分 類	サ イ ン	はい	いいえ	わからない
症状化 身体面	夏休み後、頭痛・腹痛を訴えることが多くなる。			
	登校後、暑くて気持ち悪い、だるいなどを理由に保健室に行くことが増える。			
症状化 心理面	２学期になって、表情が暗く、不安そう。			
	１学期よりそわそわしたり、周囲を必要以上に気にするなど落ち着きがなくなる。			
	休み時間になると、職員室の周りを、意味もなくうろろしている。			
行動化 外交性	夏休み後、学校外の友達が増え、遊び中心の生活になる。			
	外泊することが増える。			
	新学期になって、服装や頭髮が見た目にも派手になる。			
行動化 内向性	小学校の時、不登校の経験があるか、不登校の兆候が見られた。			
	土・日など、休み明けの欠席が目立つようになる。			
	夏休みの宿題をやってこないなど、学習に対してやる気が見られなくなる。			
	部活動をやめたがるようになる。			
	１学期に仲のよかった友達と離れ、一人であることが多くなる。			

(4) チェックリスト活用の方法

不登校のサインを見出す方法としては、日常の子どもとのふれあいの中で観察することが主であると考えられる。このほか、チェックリストの活用、他者（他の教師、保護者、生徒など）との情報交換、各種検査（性格検査、適応性診断検査、診断知能検査など）の利用、前年度の指導記録等の利用などの方法も考えられる。

以下に、チェックリストを活用した早期発見・早期対応の方法を示す。

チェックリスト活用モデル案

(1) チェックリストの活用方法を共通理解する。

- 校内研修などの場を利用する。

(2) 定期的に活用する。

- 不登校が発生しやすい学年・学期当初は、必ず実施する。
- 学校全体・学年全体で一斉に実施する。

(3) サインを発している子どものチェックをする。

- チェックが多かったり、程度が重いと感じられたりするような子どもをリストアップする。

(4) 情報を共有化する場を設定する。

- 学年会、職員会議、校内研修などの機会を利用する。

(5) 具体的な対応策を考えて、実践する。

- 不登校の兆候が発見され、支援が必要と考えられる場合は、学年会、不登校対策会議等で情報を集め、対応策を考え、実践する。
 - の7「不登校のサインに応じた対応策・支援策」を参考にする。
 - 資料編「不登校の予防を目指す発達段階に応じた支援」を参考にする。
 - 子どもの実態から組織による支援が必要と考えられる場合は、チームで支援する。
- * 資料編「組織による早期対応展開モデル案」参照

チェックリスト活用上の留意点

- チェックリストで、リストアップされた子どもについては、本人との相談の機会を早めにつくる。
- 学級担任が実施するだけでなく、教科担任や養護教諭等も活用しながら、複数の目で観察できるような工夫も必要である。
- 情報交換の場にリストアップされなくてもチェックされる項目が見られるような子どもがいる場合は、他の教師からの情報・意見も参考にしながら、本人の様子・行動等を見つめ直してみる。
- 項目に沿って、きめ細かく観察することで、子どもの精神面・心理面の健康度がチェックできるので、子どもへの対応に柔軟に活用する。

9 学校内外の連携ネットワークや組織による早期発見・早期対応の方法

(1) 連携ネットワークによるサインの発見

不登校の兆候としてのサインを早期に発見するには、学校内外の連携ネットワークを活用して、情報交換・情報連携を図っていくことが大切である。

ア 教師間の情報連携

子どもの不登校のサインはすべての教師に出されるわけではなく、担任が察知できるとも限らない。他の教師が子どものサインや変化に気づく可能性もある。教師間の子どもに関する情報交換の機会や場を、定期的にあるいは必要に応じて設定する。

- 学年会への教科担任、養護教諭、スクールカウンセラー、教育相談員等の参加。
- チェックリスト等を定期的に活用し、学校や学年で一斉に気になる子ども、サインを発している子どものチェックをしたり、情報を共有したりする場を設定。

イ 家庭との情報連携

不登校のサインは、学校と家庭の一方にしか発せられない場合もあるので、教師と家庭との情報交換の機会や場を設定する。

- 家庭でのサインの発見や学校との連携を促進するためのチェックリストの家庭への配布と活用など。

ウ 養護教諭との情報連携

子どもが不登校のサインを最も発信しやすいと言われる養護教諭との日常的な情報交換・連携を大切にする。

- 養護教諭の学年会、生徒指導部会、教育相談部会、ショートミーティングへの参加など。

エ スクールカウンセラー、教育相談員との情報連携

子どもからのサインが、スクールカウンセラーや教育相談員がいる相談室で発せられたり、スクールカウンセラーや教育相談員の自由来室活動中に発信されることもあるので情報交換の場が必要である。

- スクールカウンセラーや教育相談員の職員会議、学年会、教育相談部会、ショートミーティングへの参加など。

オ 小・中学校の情報連携

「不登校が急激に増える中学校1年時の不登校生徒の3分の2は、小学校時に何らかの不登校兆候を示していた。」「中学校1年生で不登校になっている生徒の半数は、小学校時に不登校相当の経験があった。」(平成14年中1不登校生徒調査「中間報告」国立教育政策研究所生徒指導研究センター)を踏まえて、小・中学校の情報連携を緊密に取り、中学校では、小学校での不登校兆候・不登校経験を把握する。

- 小・中学校教員の定期的な情報交換会・相互訪問・授業参観の実施など

(2) 組織による早期対応

子どもの不登校兆候のサインを発見できても、対応は学級担任一人で背負うことが多いのではないだろうか。サインを発する子どもの実態から、担任一人より組織を生かして対応した方がよいと判断される場合は、組織的な早期対応が望まれる。担任の負担が過重になることは、対応を遅らせ、早期対応を実現できない一因にもなっていると思われる。組織でかかわれば、担任の心理的負担を軽くするだけでなく、子どもや保護者への具体的な対応の方法も発見しやすく、子どもを背景から、多面的・総合的に理解できるので、担任の気づかない点(盲点)も補えるなどのメリットがある。

組織による早期対応展開モデル案

サインの発見 不登校兆候にある子どもの発見

- a 担任が不登校担当（教育相談主任）・学年主任へ連絡・報告
- b 不登校担当が学校長に報告

校内不登校対策会議の開催

- a 学校長、担任、学年主任、不登校担当、生徒指導主事（主任）等が参加して、対象の子どものアセスメント会議を開催
- b 子どもの実態把握（担任の話を中心に）
 - * の7「不登校のサインに応じた対応策・支援策」参照
 - * 資料編「不登校の予防を目指す発達段階に応じた支援」参照
- c 校内外の支援チーム形成の必要性の判断

支援チームの必要がない場合→担任中心の支援／定期的な事例検討会などで担任をバックアップ

支援チームが必要な場合

- a 支援チームの編成
- b 支援チームのコーディネーターの必要性の判断 → 第1回支援チーム会議の開催へ

第1回支援チーム会議の開催

- a チームは不登校担当が招集・進行はコーディネーターがチームのリーダー
- b 子どもに関する情報を収集
- c 得られた情報を基に、子どものアセスメント
- d アセスメントに沿って、支援計画（支援方針・支援案）決定
 - * の7「不登校のサインに応じた対応策・支援策」参照
 - * 資料編「不登校の予防を目指す発達段階に応じた支援」参照
- e 支援チーム会議の内容や支援策、支援の経過等は全体場で報告・共通理解

支援案に沿った実践の展開

- 各支援者が、それぞれの役割分担に応じた支援を実践

第2回支援チーム会議の開催

- a 支援者（支援チーム）の取組と子どもの変容等を、評価・検討
- b 評価・検討を踏まえ、支援計画（支援方針・支援策）を継続・修正

支援チーム会議の継続

- 以下、問題解決（サインの消失、不登校傾向の解消）まで、を繰り返す。

支援チーム会議の終結

- 問題解決を確認次第、支援チームは終結・子どもの経過は継続して観察（図14）

* 「組織による早期対応展開モデル案」の詳細については、資料編に掲載した。

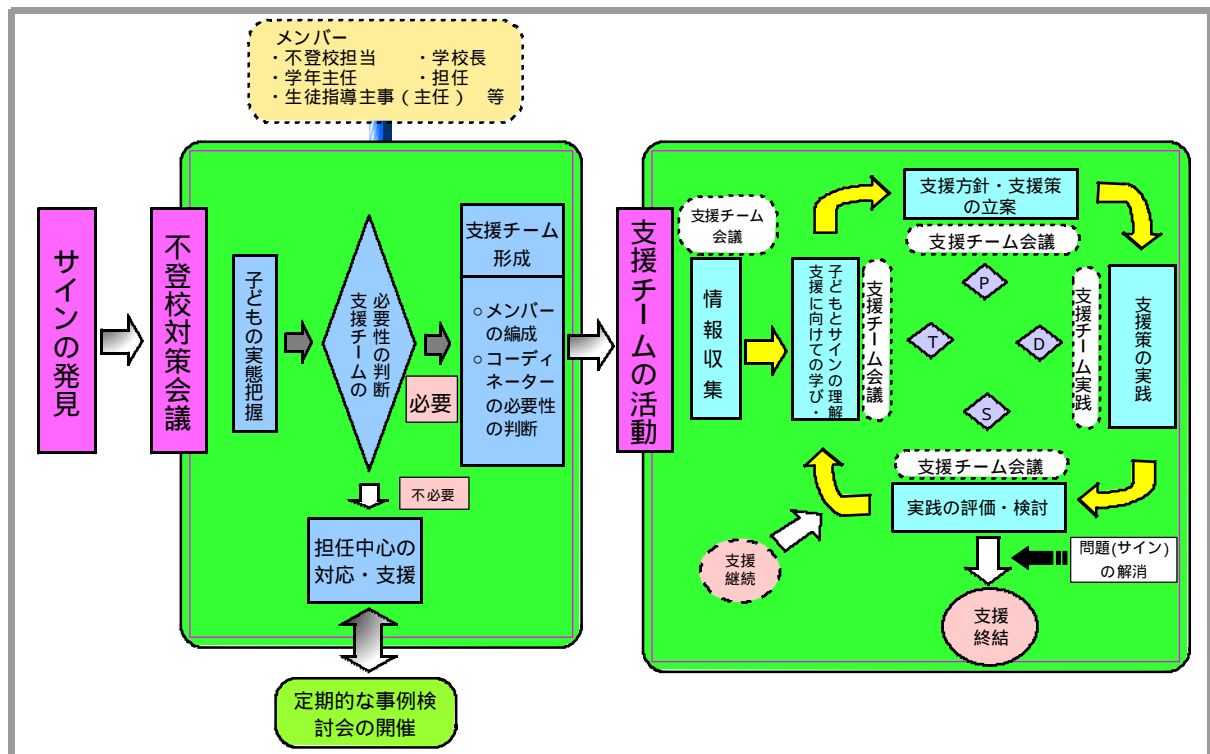


図14 支援チームによる早期対応の展開

10 早期発見・早期対応できる教師に求められる態度・姿勢

不登校の兆候を早期発見・早期対応できる教師は、日頃から、次のような姿勢・態度が必要になると考えられる。(図15)

○ 子どもとふれあう

- ・日頃から、子どもとふれあう機会をつくるのが大切である。一人一人の子どもと受容的な態度で接し、一緒に活動したり、雑談などを交わしながら話し合えるような雰囲気をつくったりする。いつもと違うサインを発見できたり、子どもが訴えようとしていることが理解できたり、友人関係の変化を把握できたりする。

○ 子どもの情報をキャッチできるアンテナ機能を高めておく

- ・他の教師も子どもに対して多くの情報をもっている場合が多い。その情報を得られるように職員室での人間関係を普段から大切にする。

○ 保護者との信頼関係を築く

- ・学級便りや連絡帳などを利用して、保護者のニーズを把握し家庭との信頼関係を築き、いざというとき家庭との連携を図れるようにしておく。また、保護者だけに原因を押しつけるのではなく、「一緒に考えていきましょう。」という姿勢が信頼関係を生み、保護者とも相談しやすくなり、子どもの家庭での情報も得やすくなる。

○ 子どもに対して、温かい心をもっている

- ・子どもが抱えている課題を、自己の課題として置き換え、その子に寄り添いながら課題を乗り越えるのを一緒に支援していこう、という温かい心があつてこそ、早期発見が可能になるし、早期発見の意味があると考えられる。

○ 他者に対して心の開いた態度をとることができる

- ・相手の話をよく聴く、人のよいところは受け入れる、素直に自分の思いや考えを伝える、自分のもっている情報を惜しまず与える、といった態度をとることで、相手に心が開かれ、サインを感じ取ることも、一緒にチームを組んで支援していくことも可能になると思われる。

○ 感性の幅をもっている

- ・元気で活発な子どもを支援しながら、内向している子どもの心の訴えを読み取っていくためには、教師が感性に幅をもつことが必要になると思われる。サインの発見には、時には子どもと呼吸を合わせ、時には声の大きさや話の速度を配慮し、心に寄り添いながらかわることが効果的であると思われる。

○ 心にゆとりをもっている

- ・教師は自分の心の状態に気づいていることが大切だと思われる。自分の心の状態が子どもへの言葉かけや働きかけに影響を与えることが多い。多忙さに押し流されて、心にゆとりがもてないと、子どものサインに気づき、働きかけていくことが難しくなる。したがって、教師自身が「心のゆとり」をもてるように、よい人間関係、心の安定や自尊感情などを保ちたい。

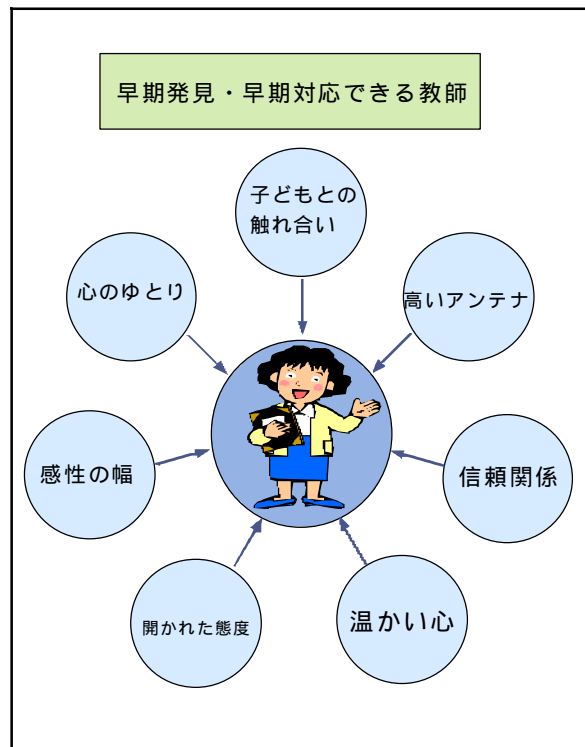


図15 早期発見・早期対応できる教師の態度・姿勢

11 不登校を出さない学級風土づくり

不登校の予防として不登校を出さない学級風土づくりが必要だと思われる。そのためには、学級風土をつくるために次のようなことに配慮することが望まれる。

(1) 相互コミュニケーション

日頃から子どもたちとのふれあいを大切にして、子どもの置かれている状況を背景から理解して、教師から子どもへの一方通行のコミュニケーションでなく、相互コミュニケーションをとることが必要である。

(2) 心の居場所がある学級風土

- あいさつや温かな声かけなどを積極的に行い、子どもの心に寄り添って、不安や苦しみに共感する姿勢が大切である。それが子どもと教師の信頼関係をつくることにつながる。
- 子どもが気楽に自分の気持ちを出せ、学級にいることに満足感を感じて、自分が集団に受け入れられているという気持ちをもつような所属感のある、承認の学級風土づくりを大切にする。
- 体験を通して、子どもが自己存在感や達成感、自己有用感を感じて、学校に来るのが楽しいと思える、活躍の場が見つけられるような学級経営を工夫する必要がある。

- お互いに相手を認め、励まし、安心感のある支持的風土づくりに心がける。(図16)

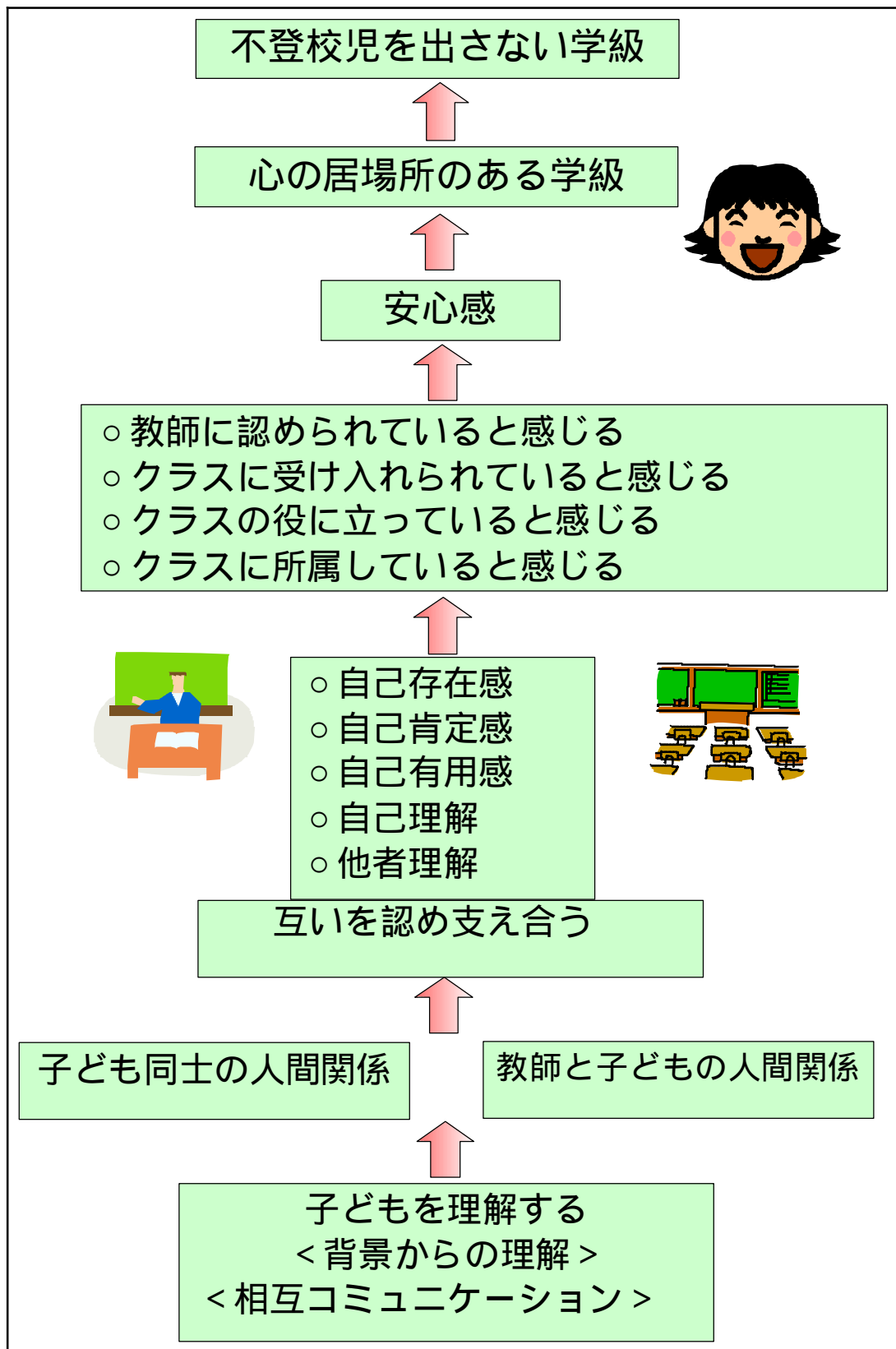


図16 学級風土づくり